松江歴史館NEWS

MATSU REKI

秋号 二〇二五年
9

松江城　photo by Jules Coussement(Instagram@picsofjulio)

戦の火種燻る
緊張の時代がここに。

松江城天守
国宝指定
10周年記念

特別展 慶長の城
— 松江城築城とその時代 —

2-3 展覧会みどころ紹介
館蔵品展 長崎家の籐細工 松江でつづく丁寧な仕事
特別展 慶長の城 松江城築城とその時代
4 新収蔵品紹介
5 コラム「雲陽秘事記あらかると」 第8回(名誉館長 藤岡大拙)
6 松江おもしろ談義ダイジェスト
7 松江歴史館のお仕事 —保存管理について ③—
INFORMATION
8 地域ゆかりの資料紹介 —城東編—

館蔵品展

長崎家の籐細工

松江でつづく丁寧な仕事

令和7年（2025） 7/18（金）〜 9/15（月・祝）

上から石畳編炭斗（二代 長崎福太郎作）、土瓶敷（五代 長崎藤吉作）、
花結編和装ハンドバック（六代 長崎誠作）いずれも松江歴史館蔵、撮影：川口淳平

現代に江戸時代の籐（とう）細工の技法を伝える長崎家の籐細工は、江戸時代末期、松江藩の料理方であった長崎仲蔵が、江戸にある松江藩下屋敷で籐細工を作ったことが始まりとされています。二代 福太郎が長崎家の秘伝の技とされる六弁の花模様が並んだ編み方「花結び」を考案するなど、各代で時代に合わせた籐細工を作り続けてきました。

現在は、六代 長崎誠氏が「松江藩籐細工」として平成16年（2004）に島根県ふるさと伝統工芸品の指定を受け、現代にもその技を伝えています。本展は、初代 長崎仲蔵から現在に活躍する六代 長崎誠氏、七代 角宏子氏、八代 川口淳平氏らの作品を展示し、江戸時代から松江で作られ続けてきた籐細工の一端をご紹介します。

長崎家初代 長崎仲蔵から六代 長崎誠まで歴代の作品が一堂に会する！

松江の伝統工芸である松江藩籐細工。江戸時代末期の初代から六代 長崎誠氏まで歴代の技を間近に見ていただけます。

松江歴史館所蔵の籐（とう）細工、一挙公開！

約30年前に松江市に寄贈いただいたおよそ80点に及ぶ松江藩籐細工を一挙にご覧いただけるまたとない機会です。

松江藩籐（とう）細工の次世代、「六代の弟子たち」の作品も！

長崎誠氏の弟子で、これからの松江藩籐細工を支える角宏子氏・川口淳平氏・藤田真理氏・山野孝弘氏の作品も紹介。

休 館 日：月曜日 ※祝日の場合は翌平日、ただし8月12日（火）は開館
開館時間：9:00〜17:00（観覧受付は16:30まで）
観 覧 料：大人 480円（380円）、松江市民 240円
中学生以下 無料

※基本展示室とのセット券の料金は大人830円（660円）
※（　）内は20名以上の団体料金
※高校・大学・専門学校に通う学生は学生証の提示で団体料金
※市民割引には運転免許証・マイナンバーカードなど、現住所が確認できるものの提示が必要

特別展

慶長の城

松江城築城とその時代

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦に勝利した東軍を率いる徳川家康は、大名の勢力図を塗り替えました。新たな領地に移った大名は、支配の拠点となる城を一斉に築き始めます。「一国一城」が命じられる元和元年（一六一五）までの慶長年間は、築城ラッシュの時代でした。

出雲国に入った堀尾氏もまた、支配の体制を整え、松江に新しい城と城下町を造りました。城普請の名手堀尾吉晴が築いた松江城は、戦争の火種くすぶる時代を映す堅固な城です。

本展では、古文書などから堀尾氏の支配の始まりと松江城築城の歴史を紹介します。

松江城　photo by Chenglu Peng（彭 程璐）

国宝附　松江城天守祈祷札（松江歴史館蔵）

慶長16年（1611）、松江城天守完成。

長く久しい繁栄を願い、祈祷をしたしるしの札に、「慶長十六暦正月吉祥日」という文字が書いてあります。この祈祷札は、松江城天守の地階に立つ創建当初の柱に張り付いていました。柱に開いている穴とぴったり一致する二つの釘穴が、本来の札の在り処を証明し、慶長16年（1611）という祈祷の年が、天守の創建年に通じることを明らかにしました。

令和7年（2025）

10/10（金）〜12/7（日）

休 館 日：月曜日 ※休日の場合は翌平日
開館時間：9:00〜17:00（観覧受付は16:30まで）
観 覧 料：大人 750円（600円）、松江市民 380円
小・中学生 380円（300円）、松江市民 190円

※基本展示室とのセット券の料金は大人1,100円（880円）、小・中学生560円（450円）
※（　）内は20名以上の団体料金
※高校・大学・専門学校に通う学生は学生証の提示で団体料金
※市民料金の適用を受けるには、運転免許証・マイナンバーカードなど、現住所が確認できるものを受付で提示

慶長時代の堀尾氏は、5つの城で出雲国を支配した。

関ヶ原の合戦の後、慶長5年（1600）に出雲国へ入った堀尾氏は、領地を支配するための拠点を整備しました。中核をなす松江城は、外海（日本海）と内海（宍道湖・中海）をつなぐ水運の結節点に位置します。中世から栄えた町場を取り込み、造成した城下町には、家臣を集住させました。国境に近い要地などには、4つの支城（富田城、亀嵩城、三刀屋城、瀬戸山城）を設けました。緊張の続く慶長時代には、本城松江城のほかに軍事拠点としての支城を要したのです。

出雲国図（東京大学総合図書館［南葵文庫］蔵）

新収蔵品紹介

松江歴史館では、歴史資料や美術作品を中心に、収集方針に基づいて資料を収集しています。松江市域あるいは江戸時代の出雲国の歴史や文化を語る上で欠かせない資料、山陰地域、日本、さらには世界の歴史や文化にとって重要な資料が地域から失われるのを防ぎ、後世へ受け継ぐとともに、その価値を調査・研究・展示によって発信していきます。

令和5年度 寄贈　足立碧圃作「李白図額」

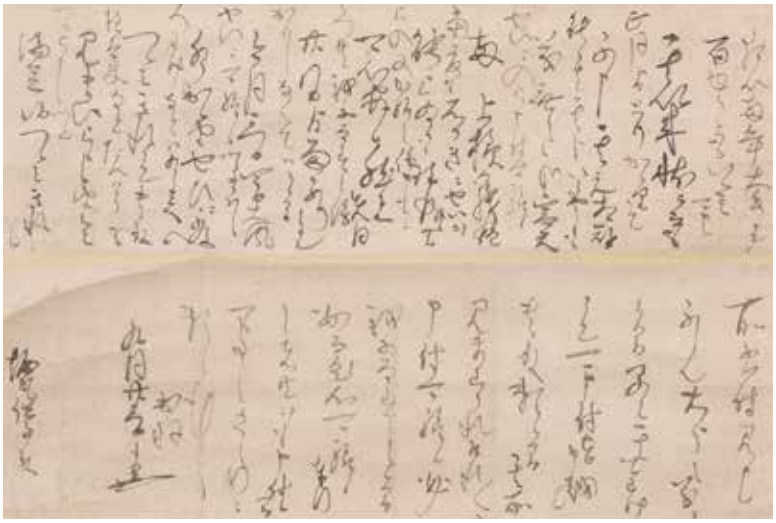
足立碧圃が制作した額

松江市西川津町出身の彫刻家・足立碧圃（1859-1929）は、幼いときから絵画・彫刻を好み、明治11年（1878）20歳で上京して彫刻の大家である高村光雲に師事しました。著名な彫刻家・平櫛田中は兄弟子であり、米原雲海（安来市出身）は碧圃の紹介で入門しています。各種の展覧会に出品入選した後、明治37年（1904）の帰郷後は郷里の松江で制作し、地元の芸術家と交流を持ちました。

碧圃は、彫像をはじめ欄間や木彫の額などの彫刻だけでなく、絵画、陶芸、漢学など幅広く活動していました。本作品は、中国の詩人・李白を表した木彫額面です。

水害に対応する重臣へ、藩主からの手紙

出雲国は8月28日からの雨と9月3日、4日の暴風雨に見舞われ、堤防の決壊などの被害を受けました。稲刈りの時期の災害は、この年の収穫に大きく影響したことでしょう。当時の松江藩主は江戸にいて不在のため、国元の重臣が災害対応を主導しました。その一人が堀尾但馬です。堀尾から被害状況の報告を受けた藩主松平直政は、その働きに満足し、堤の工事を命じる返書を送りました。全国が寛永の飢饉に陥る時期の松江藩政をうかがえる古文書です。



令和6年度 購入　堀尾但馬宛松平直政書状

令和6年度 寄贈　木椀と瓶に入った飯粒

徳川家康の食べ残しと木椀

松江藩家老の朝日家に伝わった木椀です。朝日家初代である袴田千助は、徳川家康の部将に仕えていました。徳川家が武田家と戦った際、袴田千助は敵方に忍び寄り、敵将の西郷伊予を鉄砲で討ち取ったのです。このことを朝食中の家康に報告したところ、家康は喜び、ちょうど朝日が差す時分であったことから「朝日」の姓と手にしていた木椀を与えたと伝わります。木椀にはご飯粒が残っていたのでしょう、朝日家ではこのご飯粒も拝領物としてガラス瓶に入れ、木椀とともに大切に保管していました。

雲陽秘事記

あらかると

松江歴史館 名誉館長
藤岡 大拙

雲陽秘事記

何時、誰が著したか分からないが、人から人へ書き写されて伝わった逸話集。松江藩松平家初代藩主直政から六代宗衍の時代までが取り扱われ、後、八代藩主斉恒までが追記された。収録された約二百話にも及ぶ記事は、虚実混交の憾みがあるとはいえ、よく吟味して読むと、松江藩の歴史の深叢に分け入ることができる。

第8回

鈴木八左衛門、江戸の芝居小屋にて喧嘩のこと

江戸藩邸勤務の武士に、鈴木八左衛門という人物がいた。あるとき、江戸堺町の芝居小屋へ見物に出かけたことがあった。当時、芝居の幕間に、割り込みと言って、余り品行の良くない町人の若者が、どやどやとよい席に入り込んでくる、不届きな行為がはやっていた。

この時も、鈴木のそばを通って、よい席を占領せんとする若者たちがいたが、そのうちの一人の足が、鈴木の刀の束をひっかけた。怒った鈴木は、

「無礼者！武士の魂を足蹴にするとは言語道断。その分には捨て置かんぞ」

怒気も鋭く叫んだ。ところが、若者たちはひるむ様子もなく、

「おお、良き相手だ。たたきのめしてやろうか」

とて、十四、五人が集まり、手に手に棒状の割り木をもって、鈴木に打ってかかろうとした。

鈴木はこれを見るや、下げ緒をとって襷とし、花道より舞台に上がり、大音声に叫んだ。

「松平出羽守様の家臣、鈴木八左衛門とは拙者のことなり。相手が何万人来ようとも、寄せ来るものは悉くなで斬りにせん」

と、相手が上がってくるのを待てば、花道より二人の若武者が押っ取り刀で駆け上がり、

「我らは松平越前守様の家来、何某というものだ。出羽守様のご家来の一大事、及ばずながらご加勢もうす」

と、声高らかに叫んだ。すると、また花道から三人の武士が舞台に上がり、

「我らは松平佐兵衛督様の家来、同じくご加勢申す」

と呼ばわった。割り木を手にした若者たちは、その勢いに怖れ、手出しもせずに控えていた。

その時、座元が舞台に上がり、

「不調法、まっぴら御免くださるべし」

と断ったので、何事もなく、一件落着となった。

この記事は、四代藩主吉透の時代の出来事のように書かれている。とすれば、宝永元年（一七〇四）ごろの出来事であろう。もっとも、この話そのものが芝居の台本みたいなもので、当時何処でも起きたであろう事件である。

それはさておき、宝永元年ごろと言えば、関ケ原の合戦から百年である。ようやく武家支配に反抗する町人階層が台頭する、そんな世相の一齣を描いたものか。それにしても、松平氏の同族意識が緩んできたから、このようなストーリーが生まれてくるのか。とにかく、幕藩体制が弛緩し始めたことを物語るのではないか。

松江おもしろ談義ダイジェスト

松江歴史館では、毎回異なるテーマを設けて、松江の歴史やゆかりの美術のお話をする「松江おもしろ談義」を開催しています。今回は令和7年（2025）1月の講演の内容をダイジェストでお届けします。

江戸御金方勘定目録

松江藩江戸屋敷の会計簿

松江藩は、藩主松平宗衍、治郷二代の治世における改革を機に、逼迫する財政が上向き、蓄財を果たしたことで知られます。この、松江藩の財政運営の成功を記録したのが「出入捷覧」という一冊の文書で、治郷が七代藩主となり改革に着手した明和四年（一七六七）から、九代藩主斉貴が治める天保十一年（一八四〇）までの、七十四年におよぶ収支を通覧することができます。藩政改革の金字塔ともいうべき「出入捷覧」は、藩主斉貴の手元に置かれました。つまり、松江藩の役人が実務に用いた記録ではなかった、ということです。また、「出入捷覧」を編纂するためには、根拠として帳簿などを参照したはずですが、そういった資料は現在確認することができません。「出入捷覧」は非常に優れた記録ですが、より財務の現場に近い史料、金銭の出入りを示す会計簿などの発見が望まれています。

そんな中、令和四年（二〇二二）に一冊の史料の寄贈を受けました。表題は長いので、ここでは「江戸御金方勘定目録」と省略します。

江戸時代の大名は、参勤交代で江戸と国元を往復しましたので、両地に生活と政務の拠点を持っていました。松江藩も、現在の東京都港区赤坂にあった上屋敷など、複数の江戸屋敷を幕府から拝領しています。江戸御金方は、松江藩の江戸屋敷における現金の出納を取り扱った部署で、職務を担う役人が作成した会計簿が「江戸御金方勘定目録」です。

この史料には、江戸御金方が、嘉永六年（一八五三）四月から翌年三月までに取り扱った、現金の額が記録してあります。内容は収入の部、両替の部、支出の部に分かれ、判金、金、銀、銭、四種類の貨幣の出入りを集計しています。

注目したいのは支出の部です。支出額には使途が添えられていて、その記述から当時の松江藩江戸屋敷の動きがうかがえるからです。

嘉永六年四月から翌年三月までの一年度には、松江藩の大事が起こりました。藩主の代替わりです。九代斉貴の引退を受けて、十代定安が跡を継ぎ、初めて出雲に国入りしました。この年は他にも、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーの浦賀来航にともなう江戸湾防備の強化、八代藩主斉恒の妻である月英院の卒去といった出来事があり、支出が膨らみました。「江戸御金方勘定目録」に書き上げた、繰越金を除く支出金額は、金換算で約七万五千両にのぼりますが、藩主の代替わりにともなう一連の行事に二万両以上を費やしています。

また通常の経費としては、藩主家の人々の生活費、家中扶持米などの人件費（これが最も大きな支出でした）、複数ある江戸屋敷の維持管理費、藩士が業務に用いる消耗品費などがみられます。

最後に、「江戸御金方勘定目録」には、あちこちに印があります。それも、金額の文字や紙の綴じ目に掛かるように捺してあるのです。これは、江戸御金方の役人が作成した会計帳簿を、別の者が検査し、その証拠として捺した印です。この印が、帳簿が原本であること、集計額が江戸屋敷の現金出納の実態を表していることを、確かにしています。

（副主任学芸員　笠井 今日子）

松江歴史館のお仕事

保存管理について③
殺虫

二酸化炭素殺虫処理の道具

セイヨウシミ

松江歴史館では、新たに資料を取得した際、収蔵庫に入れる前に必ず殺虫処理を行います。その方法は密封できる袋の中に資料を入れ、その袋の中に二酸化炭素を充満させて、酸素濃度を薄くし、中にいる生物を殺虫するというもので、「二酸化炭素殺虫処理」と呼ばれます。

松江歴史館が収蔵する資料の材質は、木や紙などの素材がほとんどですが、そういった素材を好んで食す虫が存在します。特に注意が必要なのは、紙を食べるシミ（紙魚）や木を食べるシバンムシ（死番虫）です。これらの虫は繁殖力が強く、資料を食べながら、どんどん増えていきます。虫が増えるにつれて、多くの資料が損なわれるだけでなく、損なわれる速度も早くなります。目に見えないダニも注意が必要です。ダニ自体は資料を食べませんが、ダニをエサとする虫が収蔵庫に入る恐れがあります。

虫を収蔵庫の中に入れてしまうと除去するのが大変難しくなりますので、進入を絶対に許してはいけません。資料を守るため殺虫処理は大変重要です。

自動販売機で買える
松江城御城印、ゲットせよ!

INFORMATION
松江歴史館からのお知らせ

今年、松江城天守は国宝指定10周年です!

松江城天守は平成27年（2015）7月8日に国宝に指定され、今年は指定10周年になります。松江歴史館では、常設展示室にて、松江城の築城や城下町の形成について、資料や映像、模型などで詳しく紹介しています。秋には祈祷札（きとうふだ）実物の特別公開も行います。また、お城に関連し、長屋門横休憩所の自動販売機では、藩主の名前と家紋が入った松江城御城印が購入できます。お城とあわせて松江歴史館にもお越しください。

地域ゆかりの資料紹介

わがとこに何があーかね？

出雲弁で「わたしたちの地域に何があるの？」という意味

松江歴史館は、松江市域ゆかりの歴史資料や美術作品を多数収蔵しています。このシリーズでは、収蔵資料や近年調査した資料などを地域ごとに紹介します。

城東編

強豪力士が住んだ城下の御船屋

城東地区は江戸時代の松江城下の東端に位置しています。今回紹介するのは、現在の東本町四丁目から五丁目にあった「御船屋」です。

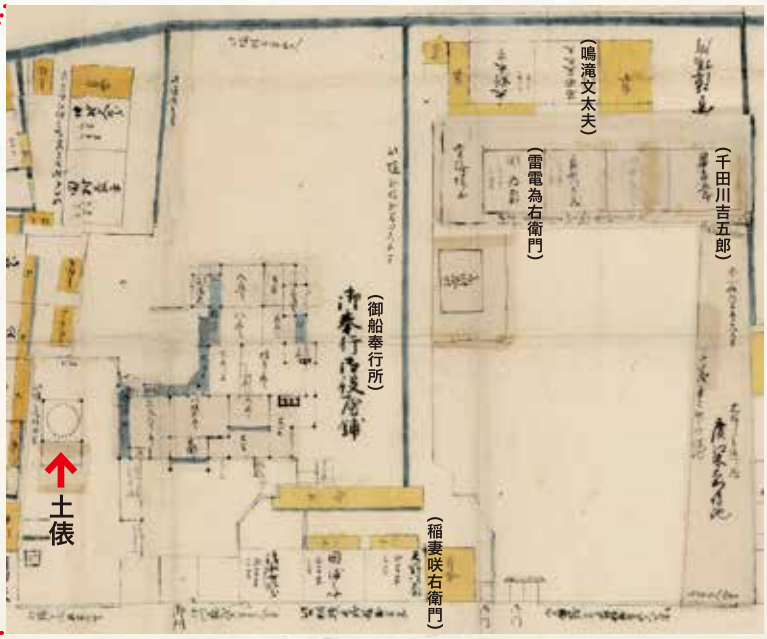
御船屋は松江藩の藩用地であり、水上交通を管轄する御船奉行所が置かれました。御船屋の敷地内には奉行所の他、藩主が遊覧等に使用する御召船用の船小屋（ドック）が三か所、御召船の造船や管理を行う御船作事方、そして船への荷物の搬出入や櫓櫂の漕ぎ手を担う水主が住む長屋が設けられていました。

水主が住む長屋には四十人から五十人程度が住み、水練や武術・船唄の修練、敷地内に設けられた土俵において相撲や曲相撲（現在でいう初っ切り）の稽古をしていました。

また、松江藩に登用された力士（雲州力士）たちも御船屋に住居がありました。御船屋の様子を詳細に描いた『御船屋分見絵図』には雲州力士たちの住む長屋が描かれています。そこには大関の雷電（関為右衛門）、千田川（田中吉五郎）、稲妻（天野咲右衛門）、小結の鳴滝（石田文太夫）ら江戸相撲で活躍したそうそうたる強豪力士たちの名前がずらりと並んでいるのです。現役を引退した雲州力士たちは後進を指導する相撲頭取となり引き続き御船屋に住んだのでした。

御船屋を含む地域は昭和六年（一九三一）に発生した末次大火により一帯が焼失したため、区画整理が行われ、町割や町名が一新しています。しかし、江戸時代の絵図はそこに何があったのか、どのような歴史を刻んでいるのかを知るきっかけになるのです。

（主任学芸員　新庄 正典）



御船屋分見絵図（個人蔵、松江歴史館寄託）

松江歴史館NEWS
MATSUREKI
第9号
【2025・秋】

発行／
松江市立
松江歴史館
〒690-0887 島根県松江市殿町279番地
TEL 0852-32-1607

ホームページ、SNSで最新情報を配信中
https://matsu-reki.jp/